



*白磁

高温で焼いてできた表面が白色の焼きもの。

生き続ける赤絵——酒井柿右衛門

今からおよそ三百八十年前、有田郷の、あるかま場でのことです。かまのたき口から出てきた喜三右衛門は、えん先にこしをおろして、つかれた体を休めておりました。大きなため息の後、ふと庭のかきの木を見上げますと、すずなりにじゆくした実が秋の日に照らされて、一層美しくその色がかがやかせております。喜三右衛門は、かきの実の色のあまりのあざやかさに、うっとり見とれていましたが、やがて、自分を取りもどしたように、

「ああ、きれいだ。あの美しい色を、なんとかして白い器にえがきたいものだ。」
とつぶやきながら、また、たき口のほうへもどっていきました。

そのころ、有田郷の泉山で取れる原石から、すばらしい白磁の焼きものが作られるようになってはいましたが、その図がらは、あい色の絵つけだけにたよっておりました。そこで、喜三右衛門は、白磁の器のはだに「赤絵」をつけるという、独特の技法の開発を思い立ったのでした。これには師しようのはげましや、貿易商人たちのすすめもあつたからです。

そして、二十年も前、苦心を重ねた末、今の中国で記録された赤絵の具の作り方の書物を手に入れた、徳右衛門と協同してこの仕事をやりぬくことにしました。

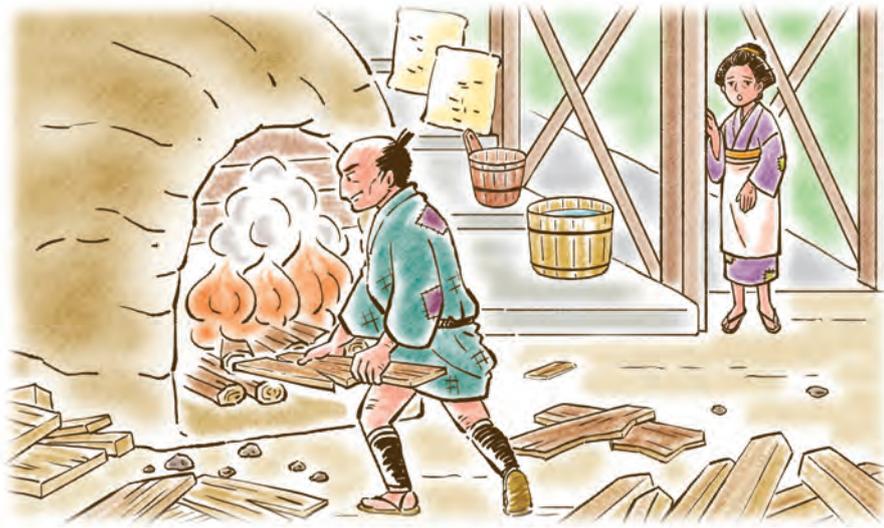
(必ず、やりとげてみせる！)



目が覚めるようなかきの実の色の美しさにひかれてからというもの、喜三右衛門は、赤絵の焼きつけに熱中しました。しかし、いくら工夫をこらしてみても、満足のいくようなかきの色の美しさは出てきません。何度も作っては焼き、焼いてはこわして、苦しみにやせ細ってゆき、喜三右衛門の様子は、見るもいたましいものでした。そして、いちばんの心の友である徳右衛門も病気におかされ、この仕事の成功を見ることなく、おしくも息を引き取ったのです。

苦労は、そればかりではありませんでした。研究のためには、ずいぶんたくさん費用がかかります。この仕事の成功を願って、とう磁器商人有田屋五兵衛は、その費用の一部を出してくれました。でも、研究と工夫ばかりに心をうばわれていては、家業もおろそかになってしまいました。五年がたち、七年が過ぎていくうちに、その日にくらしにもこまるようになってしまいました。弟子たちは、この主人を見限って、一人立ち去り二人にげ去り、今は喜三右衛門の手助けをする者さえいなくなっていました。妻や子は、真冬のしもの夜に単衣の着物で過ごしたり、習い覚えて作った、あまり出来のよくない皿やどんぶりの包みを両手に提げて、近くの村むらを売り歩いたりしなければなりません。また、かまをたくためのみきを買うことができず、小屋の板かべを少しづつはぎ取ったり、母屋の雨戸まで燃やしてしまうというありさまでした。

喜三右衛門は、それでも研究と試作をやめようとはしませんでした。人びとはこのありさまを見て、ののしかったり、あざけったりしました。それでも、喜三右衛門の心の内は、少しも変わらなかったようです。ただ頭の中にあるものは、ねても覚めても



一つだけ、夕日にはえてかがやく、あのかきの色を焼きだすことだけだったので。
このようにして、何年も何年も月日が過ぎていきました。心の支えの徳右衛門の命
日も、いく度となく過ぎ去っていきました。

年の瀬が近づいたある日のくれがた、とつ然、喜三右衛門は、かま場の口からあわ
ただしく転げるように走り出てきました。

「まきはないか。まきだ、まきだ。まきはないか！」

大声でさげびながら、そこらじゅうをかけ回りました。そして、手あたりしだいに
つかんでは、たき口に投げこむのです。もう、住まいのゆか板までがまばらになって
いたのですが、構わず燃やしていったのです。喜三右衛門は、真っ赤に血走った目を
みはって、しばらくじいっと火の色を見つめていましたが、やがて、

「よし！」

とさけんでほのおを止め、たき口のあなを、慣れた手つきでふさぎました。

次のばんになっても、喜三右衛門はたき口をはなれようとせず、今か今かと、こお
りついた夜の明けるのを待ちました。いつもより一層はげしい高ぶりを見せる喜三
右衛門の、鬼神のようなすがたをおそれるように、妻や家族は立ちすくんでじっと見
守り続けました。いちばんどりの声を聞いてからは、もうじっとしてはいられません。
むねをふるわせながら、喜三右衛門は、かまの周りをぐるぐる回ります。いよいよ、
南川原の谷間の長い長い夜が明け始めました。喜三右衛門は、がくがくふるえる足を
ふみしめて、まだ熱気のこもるたき口を、静かに開き始めました。朝の光が、木立の
間から差しこんできました。



喜三右衛門は、きんちようした顔つきで、試作の皿を一まい、また一まいと取り出していききました。何まい目かの皿を手にしたとき、

「やったぞ。これだ！」

と、耳をつんざくような大声をあげました。

「できたぞ。やっと、やっとできたぞ！ 見てください。徳右衛門さん。できましたぞ、あの色が——。」

赤絵の皿をささげるようににぎりしめた喜三右衛門は、こおどりしながら仕事場から母屋を走りぬけ、ぞうりをぬぐ間ももどかしく、仏だんの前にかけてあげました。喜三右衛門の目から、たきのようなみだが流れてくるのです。ぼうぜんとなたずむ妻や息子の種吉の目にも、大つぶの熱いものが、とめどもなくわいてくるのでした。こうして、赤絵のそめつけに成功した喜三右衛門は、まもなくそのすぐれた作品と、見事な色の出来栄えを、ときの佐賀藩主にみとめられ、多くの人びとから「名陶工」とほめたたえられるようになり、後に、「柿右衛門」と名を改めました。

四十八さいのときであったといわれています。

(作 佐賀県編集委員会／絵 イラストメーカーズ・町田ねる)

1 赤絵を完成させたとき、喜三右衛門はどんな気持ちになったでしょう。

2 苦しさに負けないで、最後までやりぬいたことはありますか。そのときの気持ちを思い出してみましよう。